

向している私が阿弥陀によって南無され、帰命され、発願廻向されている現実には気づかぬという念仏する者のコペルニクスの転回としてあらわれる。法蔵菩薩の永劫の修行とは、まさしく人間の苦意識のうちにその願をあらわさんとする人間の精神的葛藤を意味するものである。

念仏たる南無阿弥陀仏の名号について『唯信鈔文意』では「号は仏になりたまふてのみなをまうす、名はいまだ仏になりたまはぬときのみなをまうすなり」と親鸞が述べているように、南無とは私が南無するものでありながら、私意識のない南無、法蔵の南無の願に應える南無、法蔵が私をして南無させるものであり、念仏、南無阿弥陀仏は法蔵が私をして阿弥陀仏と会わしめる、私の上で法蔵が阿弥陀となる、南無が阿弥陀となる南無阿弥陀仏である。従って、法蔵の南無の願心は信受されるものであり、信は願より生ずるものであるが故に、願が仏性である限り、信心「大信心は仏性」であると言われる。古来、この仏性について無自性仏性説、遍滿仏性説があり、前者は衆生に救済さるべき可能性をみ、後者はその救済の成立する可能性も仏願力の成就であるとし、どちらが先かは結局ニワトリと卵の問題と同じであるとも言われるが、「煩惱具足と信知」等とあるように、ありうべからざるところにあった、あたえられてあった「無根の信」という宗教経験からいって自己の内に救済の可能性をみるが如きは客観的、論理的すぎて、我執、我所執に陥る危険性があるのではないか。

無上の信心が発起することは釈迦の慈父、弥陀の悲母の方便に

よるものであり、釈迦は内観により本願を説いたことから、求道者にとつて釈迦の教えは背後に聞く発遣の声であり、弥陀の欲生の声は法蔵の招喚の声である。発遣招喚の声を聞く時、「悪業」たる自我心は破れ、阿弥陀において自然の内の自己を知らされる。されば、自我心において遠き阿弥陀も浄業の念仏においては最も近きところに在るといえよう。ここに先に提起した念仏という限定性のあるゆえんがわかる。即ち、それは名号のいわれを聞く念仏においてはじめて撰取不捨の身に気づくことができるからである。

## 神泉苑の祈雨霊場化について

佐々木令信

水稻耕作を主とする有機的共同体の場合、特に、旱魃にさいして慈雨を乞うことは、生死を分つ問題として看過できないことであつた。事実、『日本後紀』以降の六国史を依拠として、平安宮における經典読誦（臨時御読経）について、目的の明確なものを抽出すると左記の如くになり、五八例のうち、祈雨のための場合が二〇例と最も多い。すなわち、

- 祈雨20、物怪8、遷御5、疫病2、地震2、年穀2、疫氣2、日異2、息災2、穀祈2、災疫2、豊年1、風災1、天下豊樂1、慧星1、国祈1、病氣平癒1、奉為先帝1、攘災1、災異1、

ということになり、六国史の記事採録方針が必ずしも一貫性がな  
いにしても、国家的行事としての祈雨のもつ意味の大きいことには  
はかわりなく、また、民間においても雨乞の行事が根強く伝承さ  
れているところである。

祈雨の驗なく、旱魃が長期にわたればわたる程、種々の方法が  
試行されることになる。『西宮記』(卷十二)には、平安初期の祈  
雨の代表的なもの十種類が載せられている。そのなかに「神泉苑  
請雨經法」とあり、神泉苑が請雨經法に代表される祈雨靈場であ  
ることがしられる。平安朝を通して、神泉苑で請雨經法の行なわ  
れた例を、実に、三一例指摘できる。もちろん、神泉苑は平安遷  
都とともに天皇・公家の遊覧場であったわけで、今ここにおいて  
は、神泉苑が祈雨の靈場となる過程・請雨經法の定着する過程の  
問題について考察してみたいと思う。

神泉苑は、漢土禁苑の制を模してつくられた。武帝の上林苑に  
代表される中国の苑池の如く、自然の景觀をとり入れ、一大池沼  
であった特質をよく生かしたもので、遊宴に関する機能をよくか  
ねそなえていた。平安朝初頭における神泉苑行幸の事例をみてみ  
ると、桓武天皇28例、平城天皇8例、嵯峨天皇42例、淳和天皇10  
例、であり、当時の奢侈的傾向を反映して、遊宴の地としての華  
やかさと盛行ぶりがしられよう。しかし、神泉苑の変遷は、律令  
体制の盛衰と無関係ではありえなく、九世紀半ばすぎには遊覧場  
としての性格も薄れがちになり、従来の神泉苑の面目を維持する  
ことは困難をともなった。社会現象のうえてとらえるならば、怨  
霊を慰める御霊信仰の流行や、疫神を祀り民衆の踊り狂う熱狂ぶ

りは、律令体制の崩壊期にひんした民間の動揺の根深さを如実に  
示しているといえる。

宗教的靈場としての神泉苑を考えると、靈なる池泉を抜きに  
して語ることはできない。その意味において、『三代実録』貞觀  
五年(八六三)五月廿日の条にみえる、神泉苑御靈会は、その祭  
場が神泉苑に設けられたこと自身、神泉苑の池畔に臨んで祓の呪  
術(儀礼)を行なう意図にもとずいたものと解すべきであろう。  
そこには、当時流行した疫病の原因たる靈を鎮めるもの、流し送  
るものとしての聖地——神泉苑の池泉なのである。

請雨經法を行なうには、國中四望の勝地、または、龍の住しや  
すい池泉の地を選び、道場をたて壇を設けることや、その他儀軌  
にのっとった準備を必要とする。神泉苑の密教化は具体的には祈  
雨靈場化に他ならないが、その先駆として、天長元年(八二四)  
の旱魃にさいして、空海が、勅を賜わり、密教における四箇の大  
法の一たる請雨經法を勤修することによって、雨を降らせたこと  
があげられる。しかしながら、暗黙のうちには了解せられている  
空海神泉苑請雨祈禱説に対して、いささか疑問を感じざるをえな  
い。

たしかに空海は祈雨を重視し五穀豊饒を願った<sup>⑤</sup>。旱魃の防禦策  
は、当時において、祈雨を行なうことであり、実践面においては  
井戸を掘り、灌漑用の貯水池をつくることであった。『日本紀略』  
天長四年(八二七)五月廿六日の条には、

命<sup>二</sup>少僧都空海。請<sup>二</sup>仏舍利内裏。礼<sup>二</sup>仏灌浴。亥後天陰雨降。

数烈而止。湿<sup>レ</sup>地三寸。是則舍利靈験之所<sup>二</sup>感応<sup>二</sup>也。

とみえ、内裏に仏舍利を奉じて祈雨を行なった空海は、この功により大僧都に任じられている。また、香川県仲多度郡・満濃池の構築や、大和国益田池完工記念碑銘の選述などに係っており、かかる具体的様相は、鎮護国家や救生利民を標榜する空海の宗教的理想に他ならなかった。

そしてまた、空海の師である真言付法第七祖・惠果も、その師である第六祖・不空も、祈雨法を駆使して天下にきこえた人物であった。不空には、『大雲輪請雨經』(二卷)・『軍吒利祈雨止雨略法』(一卷)・『隨求請雨別行法』(一卷)・『大雲經祈雨壇法』(一卷)などの祈雨法に関する訳出があり、『宋高僧伝』(卷第一)の不空伝には

(大曆七年)以<sub>三</sub>京師春夏不<sub>レ</sub>雨。詔<sub>レ</sub>空祈請。如三日内雨。是和尚法力。三日已往而霈然者。非<sub>レ</sub>法力<sub>一</sub>也。空受<sub>レ</sub>勅立<sub>レ</sub>壇。至<sub>三</sub>第二日<sub>一</sub>大雨云足。

とある記載のほか二・三の祈雨に関することがみえている。彼の『表制集』には、「恩命令祈甘雨表」、「恩命祈雨三歲和上賀雨表」、「青龍寺僧曇貞賀祈雨賜物表」など五首の祈雨に関するものがみえる。これも祈雨の効験があったことを賀したものである。

また、惠果についていえば、空海が入唐中に記した『大唐神都青龍寺故三朝國師灌頂阿闍利惠果和尚之碑』の撰文において、その事蹟を讃えるなかで、

若乃。早魃焦葉。召那伽。以霧沍。商羊決提。駟迦羅。以泉々矣。其感不移晷。其驗同在掌。

と述べており、空海自身、『參天台五台山記』のなかで成尋がい

う如く「於<sub>三</sub>唐朝<sub>一</sub>從<sub>三</sub>青龍寺<sub>一</sub>惠果和尚、伝<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>請雨經法<sub>一</sub>」されたものを、日本に持ち帰り、機会あるごとに、農耕を基盤とする根強い社会的要求に応じたのである。

しかし、惠果直伝の祈雨法を空海が実修したとはいへ、神泉苑請雨祈禱に関する限り、史料の裏付けは乏しい。『日本後紀』の天長元年の項は散逸しており、それをもとにした『日本紀略』・『類聚国史』などで補わねばならないが、空海神泉苑請雨祈禱説は記載されておらず、また、『続日本紀』の空海の卒伝、空海の伝記のなかで最も信憑性のある真済の『空海僧都伝』にもない。

空海神泉苑請雨祈禱説をとるものとして、『贈大僧正空海和上伝記』・『弘法大師行状集記』・『祈雨日記』・『僧綱補任』・『東寺王代記』・『江談抄』・『本朝神仙伝』・『今昔物語集』・『元亨釈書』などをあげることできるものの、歴史的事実とすることには無理がある。

そうみてくると、神泉苑で請雨經法が勤修された最古の事例は、管見しうる限り、貞観十七年(八七五)六月十五日から三箇日、さらに延行二日、真雅が僧十五口を率いて雨を祈ったことであろう。この頃になると神泉苑は、斉衡三年(八五六)勅使を遣わして呪法を持する有験者を試験する場所として設定されたり、瑞祥としての白鹿が美作国より獻ぜられ詔によって放たられるなど、天皇・貴族の宴遊の場所が、靈地としての性格に移行しつつあった。寛平七年(八九五)三月十日貞観寺座主の筆とする『贈大僧正空海和上伝記』に、

天長年中有旱災。皇帝勅和上。於神泉苑令祈膏雨。自然澆

陀。仍質功。任少僧都。

とするあたりが、空海神泉苑請雨祈禱説としては古く、この素朴な形が、次第に、守敏（修円）と空海の験力争いと勸善徴悪というような内容をもって神格化されたり、『今昔物語集』にみえる「弘法大師、修請雨經法降雨語」（巻第一四第四一話）という如くなる。勸をうけた空海は、神泉苑で請雨經法を勤修した。そのとき、壇の右の上に五寸ばかりの金色の蛇を戴いた、五尺ほどの蛇が出来りて、空海に寄つてきつつ池中に入った。伴僧の一人が空海に問て曰く「此ノ蛇ノ現ゼルハ何ナル相ゾ」と。件の蛇は天竺の阿耨達智池に住む善女龍王がこの池に通い給つたのである。然れば、必ず法の験あるべし、と空海は答えた。而る間、俄に空陰り、黒き雲出来りて雨降り早魃は止んだという。そして最後に『今昔物語集』は「此ヨリ後、天下早魃ノ時ニハ、此ノ大師ノ流ヲ受ケ、此ノ法ヲ伝ヘル人ヲ以テ、神泉ニシテ此ノ法ヲ被行ル、也。而ルニ、必ズ雨降ル。其ノ時ニ、阿闍梨ニ勸賞ヲ被給ル事、定レル例也。」と結んでいる。神泉苑における請雨經法のもとをなす空海神泉苑請雨祈禱説は、空海の名をもって請雨經法の功德を一層権威づけ、神泉苑の祈雨靈場化に大きな役割を果したものと考えられる。

ところで、初期神泉苑における仏教の修法による祈雨の事例をあげると次の如くなる。

齊衡 3（八五六） 太元法（常暁）

貞観 17（八七五） 請雨經法（真雅）

元慶元（八七七） 金翅鳥王經法（教日）

寛平 5（八九一） 請雨經法（益信）

延喜 8（九〇八） 孔雀經法（聖宝）

延喜 10（九一〇） 孔雀經法（觀賢）

延喜 14（九一四） 請雨經法（觀賢）

延喜 15（九一五） 請雨經法（觀賢）

天長元年（八二四）空海神泉苑請雨祈禱説が、歴史性をもつものならば、もつと早期に、請雨經法が神泉苑に定着し、祈雨の靈場となつていのではないか。天長元年頃の神泉苑はまだ靈地としての性格をもちあわせていなかったのであり、祈雨靈場となる過程においても当初必ずしも請雨經法による祈雨でなかつた点に留意すべきである。

『三代実録』貞観十七年（八七五）六月廿三日の条によれば、古老の言葉を用いて、神泉苑の池中に神龍がおり、早魃のとき「決レ水乾池 発鍾鼓声」すると「必然之験也」であるとしている。聖地であり、タブーとされる神泉苑の「決レ水乾池」は、現存の民俗でも二・三の報告がなされている如く、龍を怒らす原因をつくることであり、その強制呪術によって、水神である龍神を苦しめ慈雨を期待したものである。「決レ水乾池」の具体的内容は不明であるが、文字通りうけとるならば、満面に水をたたえた神泉苑の池泉も、従来より少量になりつつあったのではないか。『三代実録』元慶元年（八七七）七月十日の条に、早魃にあつて「引レ神泉苑池水。溉レ灌城南民田。一日一夜而水脉涸竭」したとみえる記載などは、このことの証左としてあげられよう。のち、池泉を掃除・浚渫することによって、龍神の影向を期待し、

その功德によって雨を祈ることが行なわれる。遊宴と関係なくなた神泉苑を、清浄な聖地として保持すること自体大変なことであるが、よごれていれば龍神が住まなくなるという考え方が、次第に洒掃そのものが祈雨の手段となることに、池泉の水量の変遷など幅広い考察も必要であろう。

おそらく神泉苑にあつては、『禁秘抄』に「先<sub>三</sub>藏人<sub>一</sub>若<sub>非</sub>令<sub>八</sub>弘<sub>三</sub>神泉苑<sub>一</sub>承<sub>レ</sub>仰行向。卒<sub>三</sub>人夫<sub>一</sub>先池辺石水灑。高声一同云。雨タベ海龍王。」と記載するような、池泉を中心とする龍に関する伝説ないし世俗的信仰があつて、それが密教の影響により、龍神信仰に発展したものと考えられる。その過程において、空海神泉苑請雨祈禱説が必要であつたのであり、それは祈雨の霊場となりつゝあつた貞観頃以降のことではなかつたか。神泉苑の池泉を要請に依じて灌漑用に供することの、その行為自体に功德を認め、神泉苑の池水を下す時、必ず雨降る、とする初見は、『扶桑略記』延長三年（九二五）七月廿一日の条であり、この頃には、完全に祈雨霊場となつていたものとみていい。また、延喜二年（九〇二）を初見として平安朝において二十事例を指摘できる陰陽道の祈雨行事・五龍祭（雩祭）も、最初、鳴滝北山十二月谷で単独で行なわれていたものが、具体的に何時頃かといえないまでも、おそらくこの頃には、神泉苑の祈雨の行事にくり込まれたものと考えられる。そして『左経記』や『覚禪抄』などの記すところによると、請雨経法が勤修されるとき、それに付随して、その期間の途中に五龍祭が行なわれたのである。

請雨経法を儀軌の如く行なうには、広大な霊池をもつ神泉苑

は、好都合のものであつた。請雨経法を中心とする祈雨霊場としての神泉苑は、のち雨僧正とうたわれた仁海を輩出するなど密教の祈禱全盛の象徴的存在となるのである。

#### 註

- ① 拙稿「古代における祈雨と仏教―宮中御読経をめぐる―」（『大谷学報』第五十巻第二号、表Ⅱ）
- ② 坂本太郎「史料としての六国史」（『日本歴史』一八八号）
- ③ 西田直二郎『京都史蹟の研究』に詳しい。
- ④ 柴田実「祇園御霊会」（『中世庶民信仰の研究』所収）
- ⑤ 拙稿、先掲論文で空海における祈雨の意義についてふれて  
いる。
- ⑥ 『性霊集』巻第二、所収。
- ⑦ 遠日出典「神泉苑における空海請雨祈禱の説について」（『芸林』第十二巻第三号）
- ⑧ 『文徳実録』斉衡三年八月朔日条。
- ⑨ 『文徳実録』斉衡三年十二月廿八日条。

### 靈異記に現われた僧尼

入部 正純

靈異記はいうまでもなく我が国仏教説話集の嚆矢であつて、こ